1994・10・29

おーい図書館 No.16

アメリカ東部の図書館を利用して

夫の仕事の関係で昨年四月より今年三月迄の一年間を、家族と共にボストンの西の郊外の町ニュートンで暮らしました。ニュートンは人口約八千余りの別名"Garden City"と呼ばれる緑の多い美しい住宅地で、ユダヤ系の人々が多く住み、精神科医が一番多いと聞きました。ボストンマラソンで有名な"心臓破りの丘"もここにあり、小沢征爾氏も住んでいます。ここでの暮らしからみた、私見によるボストン近辺の図書館のことをお伝えしたいと思います。

ニュートン館本 Newton Main Library

家から歩いて六、七分のところにありましたので、よく利用しました。広い駐車場と豊かな緑に囲まれて、"地域の情報センター"として市民がよく利用しているようでした。(週当りのべ一万三千人)。ボランティアも様々な場面で活動していました。本の貸出・返却、書架への配本、郵便物の発送、売店(カードや図書用品の販売)業務など、あらゆるところで活動していました。

出入口の近くには、色々な団体のチラシなどが置かれた机があり、ニュートンにある二つの公立高校の学校新聞や図書館案内、図書館への寄付を募るお知らせもありました。高額寄付者の名前が刻印され張り出されています。また雑誌類の交換箱(不用となった雑誌を入れ、逆に読みたいものを自由にピックアップしてよい)が設置されており、私も和服姿の雅子さんが表紙の雑誌を頂戴いたしました。一方の壁には、図書館に対するQ&Aの用紙を貼ったメモ板や、個人の利益を伴わないお知らせのコーナーがあって、いつも賑やかにメモがとめてありました。中央のホールの一角では、時々の話

題の本のコーナーがあって、例えば93年のノーベル文学賞を受けた時には、トニ・モリスンの著作が並びました。税金の申告時には各種の用紙の山が積まれていたのを覚えています。

館内には小さな講堂もあり、月二回水曜日の夜には映画会（"雨に歌えば"など古いのを上映していることが多かった）や、音楽会、キルト、絵や写真の展覧会がよく開かれていました。

自分で調査しやすい図書館

一番印象に残ったのは、自分で調査できるよう配慮されていることでした。図書館は三階建でしたが、中央が吹き抜けになっていてとても明るく、その中央に机（オープン）が並べられ、資料が広げられるようになっています。傍には司書の大きな机が二つあって、いつでも質問できるようになっています。周囲の壁面には二次資料が並らび、その間にコンピューターの端末がところどころにあって、脇にはメモ用紙と鉛筆が置かれていました。外側の部屋も二次資料の書棚がびっしりと並び、壁づたいにはキャレルが並んでいました。端末は館内のいたるところに置かれ、いつでも自由に検索できるようになっています。使い方の説明会も毎月何回か、昼と夜にひらかれていました。著者名、タイトル、分類コードから検索でき、フルレコード（ネットワークにより、他の図書館の情報も入っている）まで出ます。コピー機も所々に設置され、一枚15セント（隣の町ブルックラインでは10セント）でした。

―つづく―

（文・古関とし子）

発行「おーい 図書館」
連絡先 青木 和子
松戸市稔台八三〇ー六〇
〇四七三（六七）五三八四